

『計量国語学』アーカイブ

ID	KK290603
種別	追悼
タイトル	水谷静夫氏の死を悼む
Title	Tribute
著者	土屋 信一
Author	TSUCHIYA Shin-ichi
掲載号	29巻6号
発行日	2014年9月20日
開始ページ	172
終了ページ	172
著作権者	計量国語学会

水谷静夫氏の死を悼む

計量国語学会前会長 土屋信一

計量国語学会は、1956 年秋、樺島忠夫・見坊豪紀・野元菊雄・水谷静夫・宮地裕・渡辺修の 6 氏が結成準備会を作り、他に呼びかけ、計 40 名が発起人となり、12 月国立国語研究所で発起人会を開き、翌 1957 年 4 月から活動を開始した。以後、水谷氏はその中心となり、学会誌の編集・論文等の執筆はもとより、大会の運営や、会計・庶務等あらゆる雑務にかかわって、学会を支えてきた。

これに先立つ 1948 年末に、国立国語研究所が設置され、水谷氏は岩淵悦太郎・林大氏らと共に、現代語の用字・用語調査に参加し、調査の設計・実施から分析まで、数学的・統計学的方法を導入して、リードしてきた。従来の国語研究・国語施策が観念的であったものを、現実社会の実態を調査し、解析し、それを踏まえて教育・政策の有り様を提言するという、研究所の活動の基幹作りに大いに力を発揮した。

私は 1964 年に国語研に入り、用字用語調査に従事し、1 から学び始めたが、既に水谷氏は東京女子大に転出された後で、国語研の数々の報告書を頼りに氏の足跡をたどって学んだ。国立研究機関の報告書の著作権は国に帰属し、書き手の名も示されないが、一目見れば水谷氏の手になるものと分かる文章は、私たち若手にとっては教科書だった。故人中野洋が「われわれが研究をまとめると数表・グラフになるが、水谷さんがまとめると数式になる」と言ったのは至言で、いまでも忘れられない。

私が本学会に入り、会誌作成の手伝いをするのは数年後で、それから水谷氏にじかに接する機会を得た。会誌発送の日には国研の若手の会員が何人か伝通院近くのコーハン印刷に集まり、事務局から持ち込まれる封筒に会誌を詰め、束ねて、小石川郵便局へ持ち込む、これがわれわれと水谷氏との共同作業だった。その後、喫茶店で、あれこれ、と言うより、水谷氏のお話を聞いて解散、というのが十数年続いた。まことに有意義な作業だった。その後私は、国語研を出て、地方大学に勤務した 6 年間を除いて、コーハンで印刷していた間中、発送作業に加わっていたようだ。よほど性に合った、楽しい仕事だったのだろう。水谷氏にとっても、畏れ多くも、若者と交流する良い機会だったかも知れない。

計量的・数理的研究から離れた、水谷氏のもう一つの業績に『岩波国語辞典』の編集がある。岩淵悦太郎氏と、文字通りこつこつと作り上げてきた辞典である。私は 3 版から現在の 7 版まで見出し語の選択と項目の執筆作業に加わった。国研の用語調査の成果も組み込んだ、丁寧な編集で、これにも水谷氏は心血を注いでおられた。客観性を保つことに心がけていたが、後の版では、氏独特の注釈も、逆三角形▽を付けた注記欄に盛り込んだ。「岩国先生」と呼ぶ人はないかも知れないが、ここには氏の見識が明確に記されている。

水谷氏は浅草の小島小学校の卒業。私はもう少し隅田川寄りの済美小学校の卒業。すぐ近くにこんな英才が住んでいるとは露知らずに育った。 ご冥福を祈る。